論 説

ハイイロハイタカについて

Notes on the Kamchatkan Sparrow-Hawk

三 島 冬 嗣

Tōdi Mishima

ハイイロハイタカはカムチャッカで蕃殖する種類と信じられている。筆者は最近疑いなきハイイロハイタカに該当する成鳥を北海道から入手し、更に多数のハイタカと比較対照の際3個の未成熟の該当標品を検出することが出来た。ところでハイイロハイタカは普通のハイタカの淡色型とする説もあるので合わせてこの問題を考究した見解を報じようと思う。稿を起すにさきだち標品閲覧の御好意を賜った山階鳥類研究所長山階芳麿氏、小林桂助氏、靱山徳太郎氏、それに北海道の新材料を入手するに際して御好意を示された松原敏夫氏の諸氏に感謝の意を表する。

Accipiter nisus pallens Stejneger

Proc. U. S. Nat. Mus., 16: 625, 1893 (...Pref. Ibaraki, Honshiu, Japan. Type preserved in Yamashina Mus. Coll., transfered from Sci. Coll. Mus. Coll., Tokyo).

茨城県	1892 年 1 月	♀成鳥 (基型標品山階 Coll.)
北海道	1956 年 11 月	♀成鳥 (三島 Coll.)
北海道北見地方 ¹	1938 年 12 月	♂成鳥 (小林 Coll.)
伊豆八丈島 ²	1933 年 10 月	♀幼鳥 (旧靱山所蔵 山階 Coll.)
埼玉県旭村 ³	1941 年 11 月	♀幼鳥 (山階 Coll.)
本州 ⁴	1934 年 秋季	♂幼鳥 (旧靱山所蔵 山階 Coll.)

筆者が検したこの種の材料のうち以上 6 点を疑いなき *pallens* に判定した。即ちその異るところは、*nisosimilis* とは成鳥は上面が総じて灰色を呈し著しく淡いことで容易に識別され幼鳥は同じく上面が灰色に富んで比較的に淡いことで区別される。

第 1 標品は Stejneger, 黒田, 山階によって既に記載されている通りである。

1) は小林によって *pallens*, 2) 4) は靱山によって *nisosimilis*, 3) は山階によって *pallens* の亜種名がそれぞれ附箋に冠せられている。

第2標品は上面はカムチャッカ産成鳥の藍がかった灰色に一致するものと印象される。この個体は第1及び第3の標品とは頭から翕及び肩・小雨覆に亘って幾らか暗い石板色を帯びている。全体の色彩は、両側の眼先から前額及び嘴毛羽は白い(基型もこの傾向が見られる)。頭から上尾筒と肩と雨覆及び三列風切は暗色の軸が目立つ。尾羽中央対の暗色帯は基型では殆んど消失しているがこの標品は弱く認められ尾端の5~8ミリほどは白く比較的幅広い。下面の地色は白色純で帯灰褐色の横斑があり(基型では地色はほんの僅に汚色を帯びて汚白色に見える),横斑模様は普通のハイタカと同様に見られるが色調は灰色を帯びる故に淡く不鮮明に印象される。蠟膜帯緑黄色,脚趾鮮黄色,下嘴基部淡黄色。

第3標品の上面は真珠灰色とも称すべき明るい色調で第1標品の基型に酷似し、軸の顕著で、尾羽中央対の暗色帯も殆んど消失しておりそして先端4~7ミリほどは白い。下面は白地にさびバフ色の横斑があり、横斑模様は胸部の両側では白地がほとんどつぶされている位に幅広い。腹以下下尾筒は白味勝で白色は純である。この個体はカムチャッカ産11月のものに比しより淡色なることが確なようである。

第4第5及び第6標品の幼鳥は比較では頗る顕著な成鳥の場合ほどではなく普通のハイタカ幼鳥の色調淡きものに似る。がしかし上面一体の地色は淡く灰色に富み、次列風切・大雨覆・肩・腰以下尾は特に灰色味豊かでこの部分は一部の下尾筒を除き縁は淡く灰白色勝である。下面の地色は白味勝。尾端の淡色帯は灰色味豊かで淡く先端3ミリ乃至5ミリほどは白い。カムチャッカ産の幼鳥はシベリア暖帯部のものに比較して上面が淡いと記載されている。

考 察

以上要するに *pallens* の羽色が *nisosimilis* と相異なる識別点は主として上面にあり、少数の標品では♀の成鳥の上面における色差はないものである。これが *nisosimilis* の場合は♂は♀に対してより純なることは周知の事実である。

前出 *pallens* 6 個体の測定。

性及成幼	翼	尾	嘴峰	跗蹠	測定者
1♂ ad.	216.5	162	11	52	三島
1♂ juv.	203 [±]	161	11.5	52.5	三島
2♀♀ ads.	248.5-251	182.5-188.5	14.5-15	60.5-62	山階, 三島
2♀♀ juvs.	247-251	190-193	14-14.5	61-62.5	三島

他の人になる *pallens* の測定は：

採集地	性及成幼	翼	尾	嘴峰	跗蹠	測定者
カムチャッカ ¹	1♂ ad.	217	164	18*	50	Taczanowski
„	1♂ juv.	222	163	18*	52	„
宮城県 ²	1♀ juv.	250	187	—	—	黒田

となり、以上 9 個の測定の結果より見るに *pallens* は *nisosimilis* の大柄の範囲に属する。因に *nisosimilis* の測定は次のようである。

	翼	尾	嘴峰
♂ { 成鳥	220-199	166-150	12.5-10.5
♂ { 幼鳥	215-200	166-133	12-10.5
♀ { 成鳥	255-236	190-177	15-13.8
♀ { 幼鳥	255-233	201-177	15.5-13.8

Stejneger は本州で獲られた成鳥唯 1 個を *A. nisus* と比較の上、上面が一層淡くして純なる灰色をもって異るとして 1893 年に *A. pallens* の名で区別されたのであったが、同年 Taczanowski はカムチャッカ産ハイタカ 2 体を *Accipiter nisus* の名とともに *pallens* に似たその羽色を記載した。このことにより *pallens* の蕃殖地をカムチャッカと信じられるに至った。その後しかしなが黒田が本州で獲られた幼鳥について 1932 年 *pallens* の名のもとに発表した前後長年の間この亜種を採集したと云う記録が絶えてなかった次第である。尤も Hartert は 1910 年の発表で海南島から 11 月に獲られた幼鳥が淡いとして *pallens* に属せねばならないと考えるむねを記述しているが “*Accipiter nisus* subsp.?” とされてある通り又後述するが筆者の考えでは疑はしい判定に思われる。次で 1941 年及び 1942 年に山階は伊豆新島から 1 月に獲られた幼鳥が白味勝であるとしてこれを前年には *pallens* に判定した。しかしながら *pallens* なるものの推定せられている蕃殖地カムチャッカで 3 年に亘る採集中も認められなかったと云うことから、*nisosimilis* の淡色型であろうと云う説を有力と考えると記述している。後年では *nisosimilis* の名のもとに新島の標品を “仮に *nisosimilis* の淡色変り” とされた。要するにこれまでに発表あった *pallens* 又はこれと判定され得るものはカムチャッカ産の 2 個と本州の 2 個と云うことであった。

* 全嘴峰である。

1) 11 月 11 日。

2) 1918 年 10 月下旬。

筆者が *nisosimilis* について多数の材料から得た知見では、成鳥及び幼鳥の各々の羽色に両極ではかなり著しい差を認め得た。ところで *pallens* との間にあっては前述の通り成鳥は区別容易であるが幼鳥は誤られ易い似た羽色を呈するものがある。房総半島から 12 月に獲られた筆者の幼鳥標品 (No. 453), 前出の新島から 1 月に獲られた幼鳥の山階鳥研所蔵標品 (16544), その他少数の標品に見られるこのような *nisosimilis* としては淡色の部類に属する羽色では、上面の地色が総じて淡いが *pallens* の幼鳥と判定した材料と比較すれば多少褐色味が豊かで明瞭に灰色味に乏しい事実が理解出来る。この故に筆者は新島、房総その他からの淡色のものを *pallens* に判定することを疑いむしろ *nisosimilis* に同定することを正しいと考える。東亜産のハイタカについて Hartert が報じた海南島からの淡い羽色の幼鳥が果してどの亜種に属するか記載からは容易に判定をゆるされない。筆者はこの鳥に関しては判定不確定と看做す。そもそも 1914 年の記述を参照することによって *pallens* に判定しようとした根拠に疑が残る。

以上 *pallens* が採集された地方は確実にはカムチャッカ 2 回、北海道 2 回、伊豆七島 1 回、本州北部及び中部 3 回となりこの以外では知られていない。この亜種は従来の説通り少数のものがカムチャッカ地方で蕃殖すると信じられ本州中部以北の日本列島に越冬すると見られたのは以上の記録から多分に妥当性がある。故に筆者は *pallens* の成立を疑はない。

Accipiter nisus nisosimilis の 2・3 の記録と調査材料

日本鳥類目録によれば、樺太及び北海道では蕃殖が確認されていないようである。樺太においてはこのたびの材料及び記録では 4 月 (成鳥), 5 月, 6 月 (成鳥), 9 月 10 月, 11 月 (幼鳥) [Lönnberg 1908, 村田 1914 を含む] となり夏鳥なることは確実であって、この外 2 個の幼鳥は採集の月が明らかでないがこのうち靉山蒐集品 (No. 2351) は「秋季」に獲られた若い当歳の鳥であるから樺太で蕃殖の推定の根拠になりうと思う。Lönnberg も蕃殖するであろうことを推測している。千島列島から南千島色丹島で 1931 年 7 月 29 日飛翔中の 1 羽を観察し *Accipiter nisus nisosimilis* とした報告 (小林 1933) があるに過ぎなく亜種名は報告されてある通り疑はしい記録と見なければならない。北海道の標品は以外に少数に止るようである。即ち札幌博物館蒐集品 (入田・村田 1905) その他 (Blakiston 1862, Whitely 1867) の外は詳にしない。観察の記録は 7 月に 2 回 (山階 1930, 清棲¹1952) あるにとどまっていたが、周は 1957 年根室地方西別で巢卵を撮影しその後これを採集した由である。河合は 8 月 25 日石狩地方厚田郡山中海岸の森林の縁辺で 1 羽を観察している。以上の記録からはともかく、

剝製従事者或は採集従事者の談話によれば秋季は稀でないと云うことである。

調査した材料 (110 個)

樺太 4, 6, 9, 11月, 秋季, 冬季, 採集期不明 (計 7); 本州 採集期不明 (1), 青森 3 月, 採集期不明 (計 2), 岩手 10, 12 月, 採集期不明 (計 4), 宮城 採集期不明 (1), 新潟 4 月 (1), 長野 9~10 月 (2), 栃木 11, 1 月, 採集期不明 (計 4), 埼玉 11, 1 月 (計 4), 千葉 11~12 月, 2 月 (計 3), 東京 1, 3~4 月 (計 4), 伊豆大島 12 月 (1), 伊豆新島 1~2 月 (2), 神奈川 12 月, 採集期不明 (計 2), 山梨 1 月 (1), 静岡 5, 11~12 月 (計 9), 岐阜 1 月 (1), 鳥取 2, 4, 11 月 (計 4), 四国 2 月, 採集期不明 (計 4), 高知 1~2 月, 10~12 月 (計 8), 九州長崎 1~12 月 (計 2), 南大東島 11 月 (1), 石垣島 12 月 (1), 朝鮮 2~4, 8, 10, 12 月 (計 9), 斎州島 10~1 月 (7), 満洲 5~6, 9~12 月 (計 12), 支那 北京・保定・南京・杭州・武昌・宜昌 10~11, 1 月, 採集期不明 (計 10), 採集地不明 (計 3)。

Résumé

As the result of comparison of 110 specimens of *Accipiter nisus nisosimilis* from Sakhalin, Japan, Korea, Manchuria and China, etc., the author recognizes the pale form *pallens*. Its valid specimen records are: Kamchatka (2 specs., Taczanowski), Hokkaido (♂ ad. Dec. 1938—Kobayashi Coll.; ♀ ad. Nov. 1956—Mishima Coll.), 'Honshiu' ♂ juv. Autumn 1934—Yamashina (Momiya) Coll.), Ibaraki Pref. (Type, ♀ ad. Jan. 1892—Yamashina Coll.) and Saitama Pref. (♀ juv. Nov. 1941—Yamashina Coll.).

鳥 ニ ュ ー ス (Bird News)

福井県にオナガミツナギドリ迷行 A straggler of *Puffinus pacificus* to Fukui

福井県竹生市で 1959 年 9 月 30 日捕えられ, 4, 5 日飼育されて死亡したオナガミツナギドリ *Puffinus pacificus chlororhynchus* Lesson の標本が同市の会員林武雄氏から山階研黒田宛送られた。これは小笠原群島など亜熱帯産の腹の白い *cuneatus* 型で, 伊勢湾台風が 9 月 27 日北陸沖を通過しているので, その犠牲に間違いない。日本から現存標本として初めてである。現品は山階研にある。林武雄氏に御礼申上げる。発見者は竜田竜三郎氏, 体重 320 g であった由。(黒 久)

This subtropical sea bird obtained on 30 Sept. 1959 has apparently been drifted by a big typhoon which passed Fukui on the 27th September.